

## 平成 30 年度 矢作川自然再生検討会 議事概要

日時：平成 31 年 3 月 14 日（木）14:00～16:00

会場：豊田市職員会館 2 階 第 1 会議室

### 1. 開会

### 2. 挨拶（豊橋河川事務所 所長）

### 3. 議事

#### (1) 平成 30 年モニタリング結果（ヨシ原、干潟）

議事内容について事務局より説明。委員より頂いた主な意見は、以下のとおり。

#### <ヨシ原>

- ・上流側ほど干満の影響がなく、河川の流水や中州の影響を受けやすい。安定したヨシ原を再生させるためには、棚尾橋のワンドを参考したワンド型施工が一番良いと考える。(委員)
- ・現在の河道で自然再生を実施していく前提とは思う。あくまで個人的意見ではあるが、中畑橋上流左岸側の現在高水敷（グラウンド等）が整備されている箇所では、かつて広範囲にヨシ原がみられ、生物も多かった。グラウンド利用も少ないため、一部撤去することで容易にヨシ原が再生すると考えられる。(委員)
- ・棚尾橋下流のワンド環境は、潮の干満の影響があり安定している。今後ヨシ原再生を棚尾橋上流側で実施する際は、現存する良好なワンド環境を改変しないよう一部高い地盤を残すなど注意していただきたい。(委員)
- ・中州の樹林化の管理として、どう対応される方針か。(委員)
  - 維持管理として定期的な状態監視を行い、治水上問題ないかチェックし、順応的な対応を進めている。対応は年次計画をもって段階的に進めている。(事務局)
  - 前提として、日本の河川の河道管理は、低水路幅と土砂供給、流量との関係のあり方が未だ十分に整理されていない。河道計画、維持管理、自然再生の 3 つの要素を同時総合的に議論していけることが理想だが、これは難しい問題である。今回の河岸侵食は、一度河道掘削で撤去した中州が再度発達しており、必ずしも予見できない事象であった。そういったなかでの、ヨシ原再生の施工方法として問題はないと考える。(委員)
  - 事業計画の見直しでは、中州変化等の外的要因や、河道の状況（水衝部箇所）をみてヨシ原再生を優先的に進めていくべき箇所などを検討していきたい。(事務局)
- ・下流側には、逆に新しく中州が形成され、樹林化もしておらずヨシが定着できそうな環境にある。中州の環境変化について今後もみていくと良い。(委員)
  - 中州の変化、安定性については、底質との関係も想定されるため、引き続き監視していく。(事務局)

#### <干潟>

- ・窪地になっている箇所に土砂を投入して環境改善させる施工方法は理解できる。一方で、堤防側はなぜ窪地になっているのか、物理的な作用があるはず。土砂を投入しても長期的には窪地に戻ることは十分に考えられ、それはやむを得ない。(委員)

- 河道がラップ状になっており、堤防前面に砂が堆積し、堤防側には供給されずシルトがたまる。おそらく逆渦や滞留している可能性がある。洪水時には、特に洪水末期に細粒分が堆積している可能性があるが正確にはわからない。(委員)
- ・施工後モニタリングでは、流心側は砂州が動いているが、堤防側は滞留しているため、この状況のなかでどう施工材料が変化していくか、物理ベースでみていくポイントになる。(委員)
  - ・過去に比べて水がきれいになりすぎている感がある。過去に調査した際は、チゴガ二などのカニ類が非常に多かった。水質の点や、土砂移動の話など総合的に考えていけると良い。(委員)

## (2) 事業計画の見直しと次年度モニタリング計画

議事内容について事務局より説明。委員より頂いた主な意見は、以下のとおり。

- ・河川管理は、治水目的として流水を合理的に流下させることを基本とする。一方で、生物は有機的な物質の停滞が重要な要素となり、全く逆である。施工した干潟が移動することや、ヨシ原施工箇所が侵食することは自然であり問題ではない。施工干潟は、長期的には移動して海に供給される。個別の技術対策としては問題ないが、全体としては自然に逆らう必要はない。(委員)
  - ・事業計画の見直しでは、目標や施工面積の精査が必要である。(委員)
  - ・干潟再生に関して、土砂管理の視点から、上流からの土砂供給によって動く砂としてみていくべき視点がある。現場の需要側と、上流の供給側の両面から定量的な議論は難しいとは思いますが、自然再生事業の位置づけの外的要因として留意されたい。(委員)
  - ・低水路（河床）と干潟、ヨシ原（河岸の砂州）との区分を明確にしておくが良い。河道のダイナミックさを維持することは、砂州の固定化・樹林化を抑制するためにも重要な要素である。自然再生事業からみた区分を整理しておくが良い。(委員)
  - ・ヨシ原再生では、適正な高さでの切り下げによって、ヨシや湿生の重要種、マコモ群落が定着できること、ヨシ定着によって地形が安定することがモニタリングによって明らかになったのは一つの成果である。今後PRしていけると良い。(委員)
  - ・河川管理は、常に理想と現実のギャップがある。河川管理者は、様々な情報をもって計画に携わっている。関連事業に留意し、事業計画の見直しに反映してもらいたい。(委員)
  - ・1~0k 左岸には、現在自然干潟が形成され、シギ・チドリ類の良好な生息環境となっている。干潟再生の左岸側の検討では、現状の良好な環境に留意されたい。(委員)
  - ・樹林化は、矢作川全体の傾向にある。元々砂河川である矢作川で、山地性の鳥類が繁殖しているなど環境変化が進行している。樹林化についても事業計画のなかで留意してもらいたい。(委員)
- 樹林化は深刻。ヤナギ類の定着のみならずアカマツ等の森林性の樹木に遷移が進んでいる。河道管理のなかで樹林化抑制は可能か。(委員)
- 現状難しい問題。流水と地形のセットの問題であり、全国事例は蓄積されてきているが河川特性の違いから解決策は一般化できていない。ただし維持管理上問題となるため、

樹林化対策を進めていく。(事務局)

- ・総合土砂は重要な視点。川だけでなく海とも関連している。海では土砂が必要である。(委員)
- 自然再生と総合土砂の時間的スケールをあわせることは未だ難しく、相互に意識している段階。総合土砂の情報は、本検討会でも適宜情報提供していく。港湾管理者とも事業内容によっては連携していきたい。(事務局)
- ・矢作ダムが出来以前にはどれほどの土砂が下流に供給されていたか、可能であれば情報提供してもらいたい。(委員)

#### 4. その他

##### (1) 平成30年度ヨシ植え報告、平成31年ヨシ植え体験(予定)

- ・ヨシ植えイベントの周知は、流域圏懇談会メールも活用すると良い。(委員)

##### (2) その他(全体に関して)

議事内容について事務局より説明。

- ・せっかく良い事業なので、流域住民のご理解を得られるよう、外向けにも広報していけると良い。簡単なリーフレットがあると良いのでは。(委員)
- ・自然再生事業、防災などの関連事業について地域に周知していけると良い。(委員)
- ・矢作川は、砂河川としての難しさがある。動きやすい一方で、砂が供給されなければ河床低下するなど変化が生じやすい。そういった条件で自然再生を進めている。(委員)
- ・情報提供として、海では栄養不足が指摘されている。のり養殖やアサリの餌不足、イワシ類の成長が悪い等の状況。現在、矢作川浄化センターからの冬場の排水について栄養塩を可能な範囲で多く排出する取り組みをしている。水質管理の視点が変わってきている。(委員)
- ・事務局より情報提供。「防災・減災、国土強靱化の3ヶ年緊急対策」として、今後矢作川では樹林化対策を進めていく。(事務局)

#### 5. 閉会

以上